

Clinicopathological study of primary biliary cirrhosis with interface hepatitis compared to autoimmune hepatitis

メタデータ	言語: en 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: 金沢大学
URL	http://hdl.handle.net/2297/40433

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



論文内容の要旨及び審査結果の要旨

受付番号 甲第 2379 号 氏名 小林 水緒

論文審査担当者 主査 大井 章史

副査 太田 哲生

山岸 正和



学位請求論文

題 名 Clinicopathological study of primary biliary cirrhosis with interface hepatitis compared to autoimmune hepatitis

(インターフェイス肝炎を伴う原発性胆汁性肝硬変と自己免疫性肝炎の臨床病理学的検討)

掲載雑誌名 World Journal of Gastroenterology 掲載予定

Primary biliary cirrhosis (PBC)と autoimmune hepatitis (AIH)は代表的な自己免疫性肝疾患である。インターフェイス肝炎(interface hepatitis, IFH)はAIHを特徴的づける病理組織像であるが、PBCのなかにも種々のIFHを伴うものがある。本研究ではAIHと、PBCにみられるIFHの組織学的、免疫組織学的相違を検討した。【方法】IFHを伴うPBC 41例とAIH 43例の肝針生検を対象とし、肝炎の組織学的所見[IFH, lobular hepatitis(LH)、hepatitis rossette formation (HRF)、emperipolesis (EP)]の程度を半定量的に評価した。またCD3, 4, 8, 38, 20, とIgG, IgM, IgA陽性の浸潤細胞の程度を免疫染色を用いて半定量的に評価した。これらのスコアと生化学検査値との関連性も検討した。【結果】IFHの程度はPBC, AIH両群で差はなかったが、LH, HRF, EPの程度はいずれもAIHで有意に高度であった。CD3, CD38+細胞の門脈域周囲および肝実質への浸潤程度はAIHで有意に高度であった。PBCにおいて、CD3, CD38+細胞の門脈域周囲および肝実質への浸潤程度はそれぞれIFH, LHの程度と正の相関が見られたが、AIHでは相関は見られなかった。IgG+形質細胞の浸潤程度はAIHで、IgM陽性形質細胞はPBCで有意に高度であった。PBCで血清AST値とCD3, CD38陽性細胞、IgM陽性形質細胞の浸潤程度に正の相関がみられたのに対し、AIHでは肝実質におけるCD3, CD8陽性細胞の浸潤程度にのみ正の相関が見られた。【考察】AIHではHRF, EPが多くみられ、AIHに特徴的な所見と考えられた。AIHではCD38, CD3+細胞の浸潤程度が高く、また門脈域周囲の形質細胞はIgG優位であるのに対し、PBCではIgM+形質細胞が多くみられ、両疾患の免疫環境の違いを反映すると考えられた。PBCではCD38, CD3+細胞、IgM+形質細胞の浸潤程度とASTの値に正の相関があり、これらの免疫細胞が肝細胞傷害の発生に関係することが示唆された。

本研究はPBCとAIHでは肝細胞傷害メカニズムに相違があることを証明したもので、本学の学位授与に値するものと評価された。